

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月4日現在

機関番号：16301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720143

研究課題名（和文）述語形成における個体と事象の関係と「被影響」の概念に関する語彙意味論的研究

研究課題名（英文）On individuals and events in the lexical semantic structures of predicates: with special reference to the notion of affectedness

研究代表者

今泉 志奈子（IMAIZUMI SHINAKO）

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：90324839

研究成果の概要（和文）：本研究では、日・英・独語において、変則的な格表示をみせるため「例外」と見なされてきた文法現象に統一的な記述と説明を与える試みである。英語の使役（受動）文、日本語の受動詞、独語の「自由な与格」とその解釈についての研究成果に基づき、個体と事象との間に一種の「所有関係」を認め、形式化することで、イベントの内外に生起する個体の格表示に、類型論的に興味深い分類基準を見出し得る可能性を指摘することができた。

研究成果の概要（英文）：This project has closely observed a range of grammatical phenomena, which have been analyzed as idiosyncratic ones due to their seemingly irregular way of case-marking, and tried to find out and formalize the underlying rules which seem to govern their peculiar case-marking system. Based upon our descriptive works on causative/passive *have* in English, a group of Japanese verbs taking Patient subjects, “free dative” phenomena in German, we have proposed the novel semantic function POSS, which formalizes the relationship between Individual and Event on the lexical semantic representation of verbs. Also, we have shown that our analysis based upon the function POSS gives further insights into case-marking of individuals which are involved in the event, and non-thematic individuals which are regarded as existing outside of the event, and indirectly affected by the event in various ways.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：形態論・語彙意味論

1. 研究開始当初の背景

(1) 動詞の形態と意味の変則的關係

松瀬・今泉 (2001) が概観するように、日英語における「中間構文」を比較対照する際には、英語等に見られる中間構文を日本語に置き換えた例と比較するだけでは、両者の発送方法や表現スタイルの違いを際立たせるだけで、類型論的な隔たりを越えた共通項の抽出が難しくなる。むしろ、「動詞が他動詞形態を維持しつつ表層上には主語だけがあらわれ、自動詞的な意味内容を伝える」という動詞の形態と意味の間に見られる変則的な関係に着目し、そういったふるまいを見せる動詞が選ぶ主語に共通する特性を明らかにすることで、より包括的かつ精緻に態交替現象の実像に迫ることができるのではないか、という着想を得た。

(2) 態交替の多様性

そこで、今泉 (1997) では、形態論的には他動詞でありながら、実現する項は主語名詞の1項のみであるという点で、意味的には自動詞的な特性を持つ動詞グループの分析を進め、これらの動詞が選ぶ主語が能動的に動作を起こすものでありながら、同時に自らの動作によって移動や状態変化を被るような一種の再帰的關係が成立していることを指摘した。とりわけ、「高熱を出して寝込む」と「高熱が出て寝込む」における「出す」「出る」は、形態上は自他交替を起こしているように見えるが、意味的には極めて近い内容をもつことを捉えるため、Imaizumi (1999, 2000) では、語彙概念構造による意味記述に、受動的意味関係をあらわす関数 AFFECTED を導入することで、動詞の意味構造のなかに潜在的に備わる受動的意味関係を捉えることを提案した。AFFECTED は、動詞があらわす事象とその事象から影響を被る個体との関係を個体の視点から規定する意味関数であり、郡司 (1994) において既に指摘されており、Imaizumi (2000, 2001) は本質的に郡司の主張に依拠するものである。それを受けて、今泉・郡司 (2002) では、語彙モデルにおける記述と制約を整備することで、複合動詞の事象構造の細分化を通して、受動・再帰・使役の連続性を明らかにすることができた。

(3) 最適な事象構造表示のかたちを求めて

さらに、今泉 (2002, 2007) では、文学作品等から採取した事例に基づく分析などを通して、AFFECTED の汎用性を検証するとともに、分析対象を語レベルから句レベルへと拡張

することで、さらに広範囲の現象への AFFECTED 分析の適用可能性を探った。その結果として、AFFECTED 分析が、動詞の述語形成における個体と事象の関係を規定するものであると同時に、態交替という文法現象の根幹にかかわる個体の事象への関与性と密接に連動するものであることが明らかになってきた。そこで、日本語の述語現象の記述と理論的整備のために提案した AFFECTED 分析の言語横断的な適用可能性を検証する本研究課題の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、自然言語の動詞の意味記述における個体と事象概念の関係を明らかにし、語彙表示モデル上の動作主—所有者—被影者の連続性のなかに位置づけることである。特に、事象とその事象から影響を被る個体（被影者）との関係を規定する被影響の意味関数 AFFECTED の妥当性を、日本語における広範囲の文法現象の分析と、英語、独語をはじめとする他言語の現象において検証し、言語横断的に見出し得る個体と事象の関係を明らかにしようとするものである。

(1) AFFECTED 分析の汎用性検証：

本研究の述語の意味記述モデルにより、以下の①～④に挙げる文法現象に統一的な説明を与える可能性を検証する。①日本語の軽動詞「する」の主語が持つ曖昧性、②自分自身、分離不可能な身体の一部、密接度の高い所有物、所有はしていないが関与の度合いが高い対象物をそれぞれ目的語にとる広義での「再帰現象」、③他動詞でありながら受動的内容をあらわす慣用句、④連体修飾節内における感情表現。

(2) 言語横断的な適用可能性（類型論的展開）：

独語における「自由な与格」とその解釈の分析に関する研究成果を整理し、AFFECTED 分析の適用可能性を検証する。

(3) 新しい〈所有〉概念：

AFFECTED 分析を通して得られた「被影響」「個体の事象への関与」の概念をさらに精緻化することによって、日本語・英語・ドイツ語、ならびにロマンス語系言語で従来より指摘されつつ、未整理な部分も多く残されている広義の「所有」概念の文法現象への関与の仕方を再検討し、より普遍性の高い理論構築と、理論に偏らないこまやかな個別言語性の解

明を目指す。

本研究の最大の特徴は、日本語における間接受動や自動詞形態素(-ar)と対格が共起する変則的關係、ドイツ語における所有關係を読み込まないタイプの「自由な与格」現象など、一見すると変則的な「例外的な現象」は、個体と事象との關係を個体視点から捉えた述語關係が成立しているという点で通底していること指摘する点にある。いわゆる所持品や身体部位を超えた、あたらしい「所有」の概念を、ヴォイス交替現象のなかに位置づけることで、動作主(使役)―狭義の所有者(再帰)―被影響者(受動)の連続性を明らかにするとともに、より精緻な、あたらしい「所有」概念の定式化を目指す。

3. 研究の方法

(1) 被影響者主語視点と「所有」「関与」概念の精緻化(2009年度実施分)

基礎研究で展開した「出す」「出る」ペアにはじまる、動詞の形態変化を伴わない語レベルでのヴォイス交替現象が、さらに広範囲の文法現象の説明に有効であることを示すため、日本語・英語の基礎データと論点の整理を行う。

→研究代表者の所属大学において、定期研究会を開催。さらに研究会の成果をAFFECTED分析の言語横断的妥当性を検証するための方法として、研究会参加者の協力を得て、シンポジウムの開催を申請。

(2) 広義の「所有」概念とヴォイス体系への位置づけ(2010年度実施分)

継続的に定例研究会を開催。(1)で整理した日・英語の基礎データと、ドイツ語の「自由な与格」現象の分析から得られた知見に基づき、諸言語で「例外的」と言われる現象群が、「個体と事象との關係を個体視点から捉えた述語關係」において通底していることを主張する。

→Morphology Lexicon Form (MLF)での共同発表を行い、成果を広く世に問う。

(3) 例外を越えた一般化(2011年度実施分)

(1)(2)の研究成果に基づき、従来は所有者と所有物という個体と個体の關係として捉えられてきた「所有」を、個体とできごととの關係にまで拡張し、「できごと」とその所有者である主語との間に見られる關係性が、他動性の高いものから順に図1に簡略化して示した連続性のなかに位置づけられることを主張。

→その成果を国際学会で発表する。

動作主(使役)

主語→できごとを発動

↓

所有者(再帰)

主語→動作の対象との所有關係により、できごとの一部として間接的に関与する關係

↓

被影響者(受動)

主語→できごとから影響を被る關係
できごとへの関与可能性のレベルは多様。

図1：個体とできごととの關係

4. 研究成果

(1) 「被影響」から「所有」へ(2009年)

「述語形成における個体とイベント」研究会(I&E)を定期開催し、日本語・独語・フランス語における述語現象の記述的整理を進めることができた。また、日本独文学会秋季研究発表会にて、シンポジウム「文意味構造」の新展開―ドイツ語学への、そしてその先への今日的展望―(2009年10月18日、名古屋市立大学)を開催し、成果の一部を報告した(発表標題「日本語における対格の生起と「関与」の概念―被影響(affectedness)」をキーワードとして)。

さらに、このシンポジウムでの成果をふまえ、「個体」と「できごと」との間に成り立つ「被影響」の關係性を広義の「所有」と位置づけることで、従来にはなかった角度から、より普遍性の高い理論構築をめざした共同研究プロジェクトを始動させることができた。

また、新潟大学人文学部・愛媛大学法文学部人文学科との研究交流事業(言語学分野)の一環としての語彙意味論研究会(2010年2月17日、新潟大学)の招聘を受け、進行中のプロジェクトの成果の一部を発表した(発表標題:「述語形成における個体とイベント―「見つけた」のは何か、「見つかった」のは誰か―)。この発表では、英語のhave構文や日本語の受動詞(「見つかる」など)のふるまいを観察し、本研究が検証してきた「被影響」の概念を、より広義での「所有」と位置づけることで意味論的な形式化を試みたもので、イベントの内外に生起する個体の格表示に、類型論的に興味深い分類基準を見出し得る可能性を指摘することができた。

(2) 類型論的展開(2010年)

日本語における述語現象の記述的整備ならびに、ドイツ語における「自由な与格」と呼ばれる拡張的な与格生成とその解釈の分析に関する研究成果の整理にもとづき、本研究

の核となる「被影響」の概念に基づく分析の適用可能性の検証を進めることができた。まず、Morphology and Lexicon Forum (2010年7月11日、国立国語研究所)にて、口頭発表を行い(=藤縄康弘氏(東京外国語大学)との共同発表、「所有と関与のあいだ：ヴァレンス拡大の意味論的基盤についての日独対照」)、その成果の一部を公表した。さらに、ドイツ語における「自由な与格」生成と解釈に関する分析については、“Zwischen Possession und Involviertheit — Zur semantischen Basis der Valenserweiterung im deutsch-japanischen Kontrast —”(=藤縄康弘氏との共著、『ドイツ文学』141号)として、論文化することができた。

(3) 主語の性質と格表示 (2011年)

(2)に挙げた独文での成果発表は、主としてドイツ語学研究的フィールドにおける本研究の意義を問うものであったが、最終年度は日本語における述語現象の記述的整備をさらにすすめるとともに、前年度の中間成果報告において新たに導入、提案した意味関数POSS分析の適用可能性を多角的に検証することができた。具体的には、日本語動詞の自他交替現象や、英語のhave使役(受動)構文などのデータに基づき、「個体と事象との関係を個体視点から捉えた述語関係」を個体が事象を「所有する」という「新しい<所有>概念」として形式化することで、項構造上は一見すると例外的に見られる現象全般に統一的な説明を与えることが可能になる点を中心に論じた。以上の成果の一部は、Annual Meeting of the LAGB (Linguistics Association of Great Britain; 2011年9月9日、University of Manchester)にて発表した(発表題目: On affectedness and possession in the semantic structures of predicates in Japanese)。

(4) 「外的所有者」概念の普遍性

(3)のLAGBでの発表では、フロアから多くのフィードバックが得られたが、そのなかには、今後の共同研究に発展する可能性をもつものもあり、今後は、さらに言語横断的な展開が見込まれる。特に、Liliane Haegeman氏(Ghent Universit)より、現在進行中の研究プロジェクト“Multiple subjects in Flemish: the external possessor”(フラマン語における重層主語: 外的所有者)に、本発表の知見が有効ではないかとの助言を受け、現在も、継続的に情報交換中である。さらに、Nigel Vincent氏(The University of Manchester)が中心となっている自然言語における形容詞の文法的ふるまいとその形式化に関する共同プロジェクトにおいて、日本語に関する記述、論証の部分で協力者として

参画しつつ、研究を進めていくことも決まった。以上のように、研究課題の成果報告とともに、今後、新たな共同研究に参画する機会を得られたことは、当初の計画以上の大きな成果であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

- ① Yasuhiro Fujinawa, Shinako Imaizumi, “Zwischen Possession und Involviertheit : Zur semantischen Basis der Valenserweiterung im deutsch-japanischen Kontrast.” Neue Beitrage zur Germanistik 141号、査読有、2010、73-90
- ② 今泉志奈子、日本語における対格の生起と「関与」の概念—被影響(affectedness)をキーワードとして—、日本独文学会研究叢書、査読無、73巻、2010、47-65

[学会発表](計4件)

- ① 今泉志奈子、On affectedness and possession in the semantic structures of predicates in Japanese, Linguistics Association of Great Britain, 2011年9月9日、University of Manchester
- ② 今泉志奈子、藤縄康弘、所有と関与のあいだ：ヴァレンス拡大の意味論的基盤についての日独対照、Morphology and Lexicon Forum (MLF)、2010年7月11日、国立国語研究所
- ③ 今泉志奈子、述語形成における個体とイベント—「見つけた」のは何か、「見つかった」のは誰か—、新潟大学人文学部・愛媛大学法文学部人文学科研究交流事業(言語学分野) 語彙意味論研究会、2010年2月17日、新潟大学
- ④ 今泉志奈子、日本語における対格の生起と「関与」の概念—「被影響(affectedness)」をキーワードとして—、日本独文学会秋季研究発表会 シンポジウムV「文意味構造」の新展開—ドイツ語学への、そしてその先への今日の展望—、2009年10月18日、名古屋市立大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今泉 志奈子 (IMAIZUMI SHINAKO)
愛媛大学・法文学部・准教授
研究者番号：90324839

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：